

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	フランス文学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	現代心理学部・教授	前田英樹	印
自然・人文の別	自然 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	ドゥルーズとソシュールー存在・言語論をめぐってー		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・フランス文学・4年	大山 載吉	印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2007	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、フランス現代思想を代表する哲学者、ジル・ドゥルーズが独自に展開した言語論が、「構造主義」の始祖と見なされるフェルナン・ド・ソシュールが炙り出した「言語の存在の在り方」をどのように捉え、それを独自の観点からどのように変形しているかを論証するものである。ドゥルーズの目には、ソシュールは「言語には差異しかない」という決定的な発見をなしたが、それらの差異を「永遠に否定的」なものに送り返してしまったと映るソシュールはなぜ言語の存在様態に「否定」の威力を見ざるをえなかったのか。ここには、ソシュールを捕らえて離さなかった問題が存在し、これをドゥルーズは考慮することがなかった。言語の存在様態についてソシュールが沈黙せざるをえなかった場所で、まさにドゥルーズは饒舌に語るのである。こうした論点を本研究では明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[言語] [差異と対立] [否定]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

これまで、ジル・ドゥルーズにおける言語や記号が論じられることはあっても、それがソシュールの言語論との対比を通じて扱われる研究は殆どなかった。本研究は、構造主義の始祖ソシュールの思考とドゥルーズがいかに対決したか、そしてソシュールの言語論がもつ徹底性をドゥルーズがどの点において見逃していたかを明確に示しえた点で新たな視点を切り拓いた。もちろん、構造としての言語が多様態であるという点でソシュールを批判する研究書としては、例えばギュスターブ・ギョームの *Conférences de l'Institut de Linguistique de l'Institut de Paris, 1939* が挙げられるが、言語論を介してドゥルーズ哲学が否定や対立や矛盾を拒絶しながら、準-否定的概念を援用することで肯定の哲学を創り出していることを指摘する研究は殆どなく、本研究はその方向で新たな先鞭をつけるものである。しかし、ソシュールの言語論に関しては、本研究は多くのものを以下の著作に負うことができ、絶えずそれを参照することで従来の研究をさらに発展させることに寄与した。それは、「言語の存在様態」をソシュールの言語論を徹底的に論じ切った、『沈黙するソシュール』(前田英樹編、訳、著、書肆山田、八九年)、さらに、ドゥルーズに大きな影響を与えたアンリ・ベルグソン (H. Bergson) の思想のなかに見出される「言語の存在論的基礎」をこの著作に接続させた『言語の闇をぬけて』(前田英樹著、書肆山田、九四年)と、この二つの著作をさらに発展させ未聞の「言語=存在論」を提示して見せた『言葉と在るものの声』(前田英樹著、青土社、〇七年)である。本研究はこれらの著作が提起し、切り開いたソシュールの問題圏域のなかにも身を沈めて、そこからドゥルーズの思考それ自体に浮上することを狙いとしている。ソシュールは言語が「在る」ということそれ自体を、つまり具体的な存在者が「在る」ようには「ない」ことを徹底的に追及した。しかし、ドゥルーズはソシュールによるそのような「言語の非存在」の発見を見落とし、言語が「対立」(否定)を軸にした構造であるという指摘の方に批判の矢を向けた。この批判を分析することで、「肯定の哲学」として称揚されるドゥルーズの哲学が否定的なものを忌避しながら、彼独自の概念である「副次的矛盾」「不調和的調和」「不共可能性」などの一種の「準-否定」的概念を繰り出しながら自らの哲学を創造していることが明確にされる。一つの例として、フランス語の否定辞「NE」は虚辞として働くとき、それが表すのは雨が降るといふ世界の存在=現象を否定したもの(つまり「雨が降っていない」)ではない。それは、存在のレベルでの事態を何も表してはいないが、それでも何事かを表してはいる。つまり、虚辞としての準-否定は「非存在」の次元に位置する。ここにおいてすれ違ったドゥルーズとソシュールが再び出会うことになることが明確に示されたのである。

ソシュールが炙り出した「言語の存在様態」の独特の次元、すなわち、この世界に確かに存在しながらも、決して物体=身体次元にも、心の次元にも存在しない言語独自の存在領域の在り様を指摘し、そこにおいて言語は諸々の単位の連鎖から成る構造であることを確認する。次いで、それらの単位のうち、音素と呼ばれる最小の要素は「否定」を媒介として措定される事態が、「同一性」に基づいた思考法を忌避するドゥルーズの批判の契機となることを明らかにする。すなわち、「a」という音素は「b」でも「c」でもないものとして「a」と規定されるが、そのとき「a」はどうあっても肯定的に語られることはない。ドゥルーズは、言語とは構造であることを認めながらも、その構造自体は否定を媒介とした体系ではなく潜在的な多様態であることを強調する。多様態は、様々な要素が差異=微分的な関係のなかで蠢き、それらが異化=分化の経路を通して現働化される差異と反復の運動それ自体である。それは否定を知らず、ただ肯定の威力にしたがうのみである。この潜在的な多様態を現働化にもたらすものは、ソシュールでは「パロール」という実践的能力であるが、ドゥルーズはこの能力が実は共通感覚にもとづいた調和的能力ではなく、暴力的にその閾を超越させられた不調和的能力と見なしていることが明確に示されたものと確信する。

研究成果の概要 つづき

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① (大山載吉、「沈黙と饒舌——ドゥルーズとソシュールの出会い(損ね)——」、『思想』、1003号、2007年、143-161頁)